

続 雪形って知ってますか？ —白山の雪形「猿たばこ」—

* 納口恭明(防災科研)・和泉薫(新潟大)・神田健三(中谷雪の科学館)・栢原孝浩(防災科研)

かつて、雪国では山の残雪模様を、ものや動物、人などに見立てて、農事の開始や豊凶の目安として、何世代にもわたって言い伝えられていたといわれる。これを雪形という。長野県、新潟県、富山県、山形県などはこのような雪形の宝庫である。ところが、富山県に隣接する石川県は白山という名山があるにもかかわらず、そのような伝承のあった雪形の存在はこれまで少なくとも研究者の間では確認されていなかった。田淵行男著の「山の紋章雪形」¹⁾では石川県では1件のみ、「不明 白山にのみあると聞いている」と記述されている。また、鷲走ヶ岳に鷲の形の雪形が出ると書かれている文献があるが、伝承があった証拠はなく、推測にとどまっている。

2003年8月10日加賀市中谷宇吉郎雪の科学館で著者の一人、納口が行った「雪形って知ってますか？」という講演会に参加していた親子連れの母親から、「家のお婆ちゃんからそのような話を聞いたことがある」という情報を得て、その場でそのお婆ちゃんと電話で話をし、猿とタバコの葉に見立てた「猿タバコ」というかつて伝承のあった雪形が白山に出ることを知った。その場では翌年の雪形のシーズンになったら、訪ねていくので、「猿たばこ」がどれかを教えてくれるように約束した。



図1 ポジ型の雪形「猿たばこ」。向かって左がたばこの葉、右が座っている猿。どれかわかるでしょうか？よくわからないのが普通。

2004年5月14日、納口と和泉が加賀市打越町にあるこのお婆ちゃん宅を訪問し、「猿たばこ」を2004年5月10日神田撮影の白山の写真をもとに特定した(図1)。

打越町ではたばこは作られていなかったが、隣の矢田町ではかつてたばこが栽培されていた。この雪形は畦塗りの目安としてかつては伝承されていたという。田植えは、戦前は6月ころ行われていたが、今は5月はじめであり、雪形伝承も農業技術の進歩とともに失われたようである。

伝承地の加賀市打越町(約100戸)では農業を営む昭和一桁生まれまでの人には常識のようである、しかし若い世代はほとんど知らない。このお婆ちゃんのご主人とこの季節になると「猿たばこ」のことをよく話すという。お嫁さんには直接話した記憶はないが、そんな会話を小耳に挟んでいたのではないかとのことである。息子さんは、聞いたことはあるがすぐ忘れて、どれが「猿たばこ」かわからないとのことであった。お婆ちゃんが実際によく聞いていたのは両親からで、自身が農事の目安として使っていたわけではないという。昭和30年代ころから「猿たばこ」は聞かなくなった。打越で調査中に、通り合わせた同じ集落の男性(昭和5年生まれ)に「猿たばこ」について伺ったところ、当然のようにご存知であった。ところが、隣の箱宮という集落に住む、この地域の歴史に詳しい古老に伺ったところこのような雪形についてはまったく知らなく、大変興味深い。戦前まで、この辺りでは婚姻は同じ集落でのみ行われており、したがって雪形伝承は他集落には伝わらなかったのではないかと。

本報告では、この地区の小学校で行った雪形「猿たばこ」に関するアンケート調査結果を含めて、雪形伝承の現状を述べるとともに、雪形について深くは知らない気象学会員に雪形の文化性、科学性、国際性、娯楽性をとおして、その魅力と怪しさを解説する。